

数研 AGORA

▶高等学校におけるアクティブラーニング型授業の実践 / 大塚雅之……1

▶公共財についてゲーム理論による教材をもとにしたアクティブ・ラーニング / 山本雅康……5

No.65

この用紙は、再生紙を使用しています。

高等学校における アクティブラーニング型授業の実践

大阪府立三国丘高等学校教諭
大塚 雅之

1. はじめに

今日、高等学校でも日常的に使われることとなったアクティブラーニングであるが、もともとは大学教育から入ってきたものである。大学では、高等学校以上にアクティブラーニング形式での講義の割合が大きくなってきており、成功事例だけでなく、さまざまな失敗事例⁽¹⁾の報告もなされている。そのような失敗事例などを踏まえつつ、さらに「深い」学びにつなげることを目指す「ディープ・アクティブラーニング」⁽²⁾といったものも提唱されてきている。本稿では、アクティブラーニングの質を高めるための工夫の一つである「逆向き設計」を参考に行った、「政治・経済」でのアクティブラーニング型授業の実践を紹介したい。

2. 逆向き設計

「逆向き設計」⁽³⁾とは、最終的に教育によってもたらされる結果からさかのぼって、授業やカリキュラムの設計を行い、評価方法を事前に構想するというものである。授業のデザインのしかたは、次の三つの順序からなっている。

- ①求められる学習成果を見定める。
- ②評価の方法・根拠を決める。
- ③授業のしかたと学習の進め方を計画する。

このような手法は、生徒が能動的になることを意識するあまり、生徒に「身に付けさせたいこと」がぼやけてしまうのを防ぐのに有効である。指導と評価の一体化を重視する高等学校の教員にも受け入れやすいものではないかと考えられる。

3. 指導計画

(1) 対象とする授業

科目	政治・経済(2単位)
対象	3年生(約160名 1クラス約40名)
単元	「少子高齢化と社会保障」
学習内容	1限 社会保障の意義 2限 日本の社会保障制度 3限 日本の社会保障制度の課題(本時)

(2) 授業の設計

①求められる学習成果の見定め

まず、その単元で生徒に身に付けさせたい概念は何かを考える。今回は、「政治・経済」の経済分野のなかの「社会保障のしくみ」に関して、以下のような概念を身に付けさせたいと判断した。

獲得させたい概念的知識

- A トレード・オフ
- B 実質値と名目値
- C 税の垂直的公平と水平的公平

これらの概念的知識は、単に「覚えなさい」というものではなく、活用させなければ意味がない。そのためには、生徒が概念的知識を活用し、深い学びにつながるような場面設定をする必要がある⁽⁴⁾。

②評価の方法

「逆向き設計」では、評価の方法や根拠について、ルーブリック(評価指標)を用いることを基本としている。ルーブリックとは、単にペーパーテストの得点によって評価を行うのではなく、評価の観点を複数示し、それぞれの観点の達成度合いの特徴を表したものである。

ただし、今回の授業では様々な能力を測るのではなく、概念的知識を活用する思考力を問うことを主題とした。そこで、授業を行う前に以下のような評価問題を作成した。現任校でも、単なる暗記だけでは解答できないこのような問題について、苦戦する生徒が少なからずいる。

評価問題

日本の経済政策に関する記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ①年金の支給開始年齢を引き上げれば、財政における社会保障費が増大する。
- ②デフレ下においても年金の給付水準が一定であれば、現役世代の暮らし向きを基準とした場合、年金の価値はさらに高まる。
- ③月々の年金保険料の支払い額を引き上げた場合には、現役世代よりも年金受給世代の負担が増大する。
- ④消費税の税率を引き上げたとしても、65歳以上の高齢者には、経済的な負担は及ばない。

③授業の方法

授業においては、グループに共通の課題を与え、意思決定をさせる方法をとることにした。同じ社会的事象でも、それぞれ見方が異なり、自らの考えを伝え合うことや、お互いの考えをどう調整していくかという過程が、深い学びにつながると判断したからである⁽⁵⁾。

授業では、全員にワークシート、グループごとに複数の資料を配布した。資料は、マクロ経済スライドに関するもの、年金保険料と年金支給開始年齢引き上げのスケジュールに関するもの、年金受給額の低さから事件を起こした男性についての記事などで

ある。これらの資料の内容をグループごとに読み込んだうえで、「消費税率」・「年金保険料」・「年金支給開始年齢」について現状維持とするか、引き上げるか、の八咫の組み合わせ⁽⁶⁾を考えさせる課題を与えることとした。概念的知識の活用場面として、下のようなものを目指した。

また、配布した資料以外にも資料集やiPad、スマートフォンなどの使用も許可した。

概念的知識の活用場面

A トレード・オフ

限られた税収や保険料のなかで、①「消費税率」を10%よりも高くするかどうか、②「年金保険料」を2017年以降も引き上げるかどうか、③「年金支給開始年齢」を65歳よりも引き上げるかどうか、を考えさせる。このような複雑な問題をトレード・オフの考え方に基づいて、多面的・多角的に分析する場面を作り出す。

B 実質値と名目値

デフレ下でマクロ経済スライドの発動が遅れたために、世代間の格差が拡大しているという新聞記事を読ませる。物価によって、受け取る年金の価値が変わることに気付かせ、実質値と名目値の違いについて理解する場面を作り出す。

C 税の垂直的公平と水平的公平

消費税率を引き上げる場合を考えさせることで、これからも収入が増える可能性のある現役世代と、年金収入のみに頼ることになっていく年金受給世代の負担の違いについて考えさせる。税負担の公平性について、価値判断する場面を作り出す。

授業で提示したスライド

本日のスケジュール

- ①個人作業(資料把握)(5分)
- ②資料の内容の共有(5分)
- ③政策を二つに絞る(5分)
- ④政策を検討する(20分程度)
 - ・評価基準を決める
 - ・どの基準を重視するか話し合う
 - ・政策のスコアを話し合う
- ⑤結論・発表(残り時間)

授業の展開

導入	<ul style="list-style-type: none"> 年金制度の問題点について考えさせる。 今後の政策について、「消費税率」・「年金保険料」・「年金支給開始年齢」の三つの側面から、それぞれ「現状維持」か「引き上げる」かについて、八つの選択肢の組み合わせのうちどれがよいかを考えさせる。
展開①	<ul style="list-style-type: none"> 約5名ずつのグループに分け、それぞれのグループに5種類の資料⁷⁾を配布する。 それぞれのグループの生徒にどの資料を担当するかを決めさせて、熟読させる。 資料の内容について班内で情報を共有させる。
展開②	<p>課題「政策担当者として、将来の社会保障のしくみについてグループで意思決定しなさい」</p> <ul style="list-style-type: none"> 各グループで、八つの選択肢のうちから、二つの選択肢に絞り込ませる。 その二つの選択肢について、重視する観点を話し合わせる。 二つの選択肢を比較し、最終的な選択を導き出させる。
まとめ	各グループがクラス全体に発表。

(4) 分析 (Alternative Analysis) 各班で基準、ウェイト (1~10) を決める。

分析基準	ウェイト	政策 ()		政策 ()	
		スコア	合計	スコア	合計
①	x				
②	x				
③	x				
④	x				
⑤	x				
スコア合計					

(5) 結論(現状と根拠を明確にして)

(6) 感想

配布したワークシートの一部⁸⁾

4. 実際の授業の様子

展開①では、各グループに資料を配布し、各人が担当を決めたうえで5分ほど熟読し、グループ内での説明の準備をする。資料を読み終えると、グループのなかで、互いの資料について説明し合う。ここからは、生徒の話し声が教室中に響き渡る⁹⁾。

展開②では、「政策担当者として、将来の社会保障のしくみについてグループで意思決定しなさい」¹⁰⁾

とスライドに提示し、八つの選択肢のうちから二つの選択肢に絞り込ませる。

◆八つの選択肢の組み合わせ

	消費税率	年金保険料	支給開始年齢
A	現状維持	現状維持	引き上げ
B	現状維持	現状維持	現状維持
C	現状維持	引き上げ	引き上げ
D	現状維持	引き上げ	現状維持
E	引き上げ	現状維持	引き上げ
F	引き上げ	現状維持	現状維持
G	引き上げ	引き上げ	引き上げ
H	引き上げ	引き上げ	現状維持

選択肢を二つに絞ってからは、①各グループで比較するうえでの分析基準を自由に決めさせる。こうすることで、「高齢者」や「経済成長」などの様々な視点を出し合わせるができる。②とくにどの基準を重視するか(ウェイト)を1~10の範囲で自由に決めさせる。このようにすることで、そのグループがどのような視点を話し合いのなかで重視したのかを可視化できる。③それぞれの選択肢について、観別でのスコアを1~10の範囲で決めさせる。④最終的にウェイトとスコアをかけ合わせ、合計得点を算出させる。

たとえば、生徒のワークシート①では、EとFの選択肢を比較するうえでの分析基準を、「財政」、「個人負担」、「老人の観点」、「経済成長」とし、「財政」を一番重視していることがわかる。

選択肢のEとFの違いは、Eは「年金支給開始年齢」を引き上げるとしている点である。このグループでは、支給開始年齢を引き上げることは、「財政」としてはよいことであるが、「老人の観点」からは厳しいものであると判断したと評価することができる。

(4) 分析 (Alternative Analysis) 各班で基準、ウェイト (1~10) を決める。

分析基準	ウェイト	政策 (F)		政策 (E)	
		スコア	合計	スコア	合計
① 財政	10 x	5	50	8	80
② 個人負担	8 x	7	56	7	56
③ 老人の観点	5 x	10	50	5	25
④ 経済成長	8 x	7	56	7	56
⑤	x				
スコア合計			212		217

生徒のワークシート①

他方、生徒のワークシート②では、EとHを比較している。EとHの違いは、Eでは、「年金支給開始年齢」の引き上げを行おうとし、Hは「年金保険料」の引き上げを行おうとしている点である。このグループでは、「社会的に受け入れられるか④」のウェイトが高いため、Hの選択肢のスコア合計が高くなっていると評価することができる。

(4) 分析 (Alternative Analysis) 各班で基準、ウェイト (1~10) を決める。

分析基準	ウェイト	政策 (E)		政策 (H)	
		スコア	合計	スコア	合計
① 難易度	8 ×	6	48	7	56
② 社会的に受け入れられるか④	10 ×	1	10	8	80
③ 影響力	8 ×	5	40	5	40
④ 社会的に受け入れられるか④	5 ×	7	35	2	10
⑤ スコアード	6 ×	5	30	5	30
スコア合計			163		216

生徒のワークシート②

5. 主な生徒の感想

- ・あるところを補おうとするとどこかに不満が出るので、制度を一つ変えるにしても、多数の方面への影響を考えないといけないので悩ましい。
- ・「世代間の平等」は難しい。私は、今後も生活していく時間の長さで、若者重視がよいと思ったが、少子高齢化の今では厳しいのかもしれない。
- ・色々な意見が、たった数班なのに出るので、国家単位で政策を実行するのは難しいと思った。
- ・自分たちが気付いていなかった医療の観点から支給開始年齢引き上げを言っていた班はスゴイと思った。
- ・とても頭を使いました。楽しかったです。
- ・寿命や体力などは個人差があり、支給開始年齢を何歳にするかという問題は難しい。
- ・それぞれにメリット、デメリットがあって、考えれば考えるほど迷いました。

6. おわりに

前年度は、単元ごとに模擬議会やポスターツアーなど、アクティブラーニング型授業とよばれるものを導入していった。意外だったのは、これまでの授業と比べても進度にほぼ遅れがなかった点と、多くの生徒達から好評価を得たことである。おそらく、従来型の講義中心の授業とアクティブラーニング型授業の両者を組み合わせていったことがよかったのではないかと考えている。

大学入試改革に合わせて、高等学校でもアクティブラーニングが注目されているが、従来型の講義中心の授業が全くなくなるわけではないことは確かだ

ある。従来型の講義中心の授業と、アクティブラーニング型の授業の両者を、バランスよく組み合わせ、生徒の学びの質を高める工夫をしていくことが、今後求められていくのではないだろうか。

【注】

- (1) 中部地域大学グループ・東海Aチーム編『アクティブラーニング失敗事例ハンドブック』(2014)。名古屋商科大学ホームページなどから入手可能。
- (2) 松下佳代、京都大学高等教育研究開発推進センター編著『ディープ・アクティブラーニング』(勤草書房、2015)。
- (3) 「逆向き設計」はウィギンズとマクタイによる用語であるが、本稿では、西岡加名恵編著『逆向き設計』で確かな学力を保障する』(明治図書出版、2008)p.14の記述、溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』(東信堂、2014)p.120の記述を参照している。
- (4) 鋒山泰弘、赤沢早人『授業と評価をデザインする 社会』(日本標準、2010)p.150、p.151を参照。
- (5) アクティブラーニングの意義については、上記の溝上慎一氏の著書に詳しく書かれている。溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』p.106を参照。
- (6) 年金制度における意思決定学習の授業については、田中一裕「高等学校公民科における操作的意思決定モデルの教育効果研究」(新潟大学大学院現代社会文化研究科博士論文、2013)第五章を参照。
- (7) 読売新聞(2015年9月29日朝刊1面)、厚生労働省資料などを配布。
- (8) このような分析基準とウェイト・スコアの決定により意思決定する方法については、Asian Development Bank『Using the Logical Framework』(1998)を参照。
- (9) CoREF(大学発教育支援コンソーシアム推進機構)の提唱する知識構成型ジグソー法を参考に、現任校の生徒の実態に合わせてアレンジした手法である。
- (10) 高校生(若者)という立場にとらわれず、「よりよい社会を作るために公正に判断しなさい」という意味でこのような課題の与え方をした。三藤あさみ、西岡加名恵『パフォーマンス評価にどう取り組むか—中学校社会科のカリキュラムと授業づくり—』(日本標準、2010)を参照。